

長野県革新懇ニュース

2022 年 2 月号
発行日 2 月 10 日
会 費 2,000 円
購読料 3,000 円 (送料込)
振 替 00510-3-15971

272

発 行 日本と信州の明日をひらく県民懇話会
(長野県革新懇) 発行人：山口光昭 編集長：高村裕
〒380-8790 長野市県町 593 高校教育会館内
TEL：026-234-1231 FAX：026-234-2219 メール：mail@nagano-kakushinkon.com

==== 今号の主な記事 =====

- 1 面 中谷富美子さんインタビュー
2 面 1 面続き、「近現代信州の歴史回廊」小平千文さん
3 面 千曲川遊水地計画を考えるつどい 佐久革新懇・依田輝孝さん
読者の声、漢字パズル
4 面 雨よ降れ トルストイノの死 窪島誠一郎さん
写真で辿る信州と戦争「神風特別攻撃隊之碑」北原高子さん
映画評論『B I L L I E』内山到さん

長野県革新懇

検 索



運営のコンセプトは 「わたしの街の映画館」

な か た に ふ み こ
中谷 富美子 さん

(長野グランドシネマズ経営者、中谷商事(株)社長)



長野市吉田生まれ。生まれも育ちもほぼ映画館。都内の短大を卒業後、長野市の出版社に就職。その後、母親の病気を機に実家の中谷商事(株)に取締役として入り、長野グランドシネマズを設立。2016 年から中谷商事株式会社代表取締役社長。

戦時中に祖父や父たちが北海道からこの地に引越してきて、長野市吉田にあった土地で何かをしようということが始めたのが吉田劇場という映画館でした。1950 年のことです。特に映画が好きというわけではなく、儲かるだろうということが始めたらしいです。その後、長野市の中心部、権堂近くの田町に移って引き続き映画館を経営しました。最盛期には経営も順調で急成長しましたが、その後テレビの普及拡大で映画が次第に斜陽化するにつれて、経営を多角化しないと駄目ということ、同じ場所で映画館

Q シネコン開業の経緯をお聞かせください。

戦争直後に開業
映画の興隆とともに

やボウリング場などをやるということもありました。それでも映画館の運営は厳しく、ある時期から興行会社に運営を委託することにしました。

ところが、いわゆるシネコン(シネマコンプレックスⅡ複合型映画館)が登場すると映画業界が息を吹き返し、観客数も増加に転じるようになりました。日本で最初にシネコンが誕生したのは1993 年のことですが、それ以降急速に全国に広がっていきま

した。しかし、長野市には2000 年ころまでシネコンはありませんでした。当然大手の興行会社が長野市への進出を狙っていました。当時、運営委託をしていた東宝東日本興行さん(現在はT O H O シネマズに合併)から「郊外型のシネコンをやらなにか」という相談がきました。

私としては長野市の中心市街地から動きたくない、同じシネコンをやるにしても、祖父が興し、長年にわたって映画で人々を楽しませてきた場所でありたいという強い思いがありました。そこで、東京在住で現在は専務の妹と一緒にいろいろな方々と交渉に交渉を重ね、長野市役所のすぐ近くである今の場所で「長野グランドシネマズ」をオープンすることにしました。

2006 年のことです。

シネコン運営の 三つの思い

Q シネコンに対する思いは?

シネコンを運営するにあたっては三つの思いがありました。一つは、シネコンなら

ば、全国一斉もしくは全世界一斉の上映ができるということとです。それまでは東京で公開されてから1ヶ月ぐらい経って初めて地方に作品が来たわけですね。いくら封切館であつても、それが当たり前でなかったですね。だから、一斉上映というのは大変画期的で魅力的でした。

もう一つは、公共の場所でのマナーを学ぶ場所として残したいという思いです。隣に知らない人が座るわけですからお互いに迷惑をかけないように気配りをする、そういうことを学ぶ場としての映画館というのは大事だと思っています。

残りの一つは前述しましたが、街の中に映画館を残したいということ。当時は郊外型のシネコンがスタンダードとなっており、地方都市では商店街などにあった古くからの映画館が消えていきま

した。映画館は地元根差した施設です。旅行中の人が立ち寄るよりは近隣の人たちが来ることが多く、働くスタッフも、地元のお客様の県民性・市民性をよくわかっていきます。そういった中で、地元スタッフの感性や自主性や、地元のお客様とのコミュニケーションを第一に考えながら、「わたしの街の映画館」をコンセプトに運営してきました。

映画は元気の素

Q 映画の役割についてはどのようにお考えですか?

ここがオープンする時に随分いろいろなメディアから「あ

なたにとって映画とは何ですか?」と問われましたが、生まれた時から身近にあったものですから、改めて尋ねられると当惑してしまつたわけですね。そこで色々考えて、「映画は元気の素」と答えることにしました。

「元気」という言葉が適切かどうかわかりませんが、何かの種、素になるものという思いを込めています。悲しい映画にしろ、楽しい映画にしろ、社会派にしろ、そういう要素を持っているのではないのでしょうか。だから悲しい映画を観て、自分にすり合わせ

てみて、「ああそうだな。こういう気持ちってあったな」という確認をする素だったり、感動的な映画を観て「ああこんな頑張っている人っているんだ」「そういう考えがあつたんだ。じゃあちよつと頑張ってみようか」という

元気の素であつたり、何かのきっかけになる素になっているのではないかと思います。映画がそんな役割をはたせればいいのではないかと考えています。だから何かのきっかけで種、素になればいいと思っています。それは生きていく上でのメインにはならないかもしれませんが、スパイスになったり栄養剤になったりして生きるうえでの糧となればうれしいと思います。

コロナで共有の場が 失われている

Q 「コロナの影響はどうですか?」

感染の拡大のなかで「不要不急のことは止めてください」と言われていますが、映

画は不要不急なもので、別になくてもいいし、急いで観るものでもないということが言われ、皆でがつかりしたことがあります。コロナで集まる機会が少なくなっています。が、そうすると、人々の繋がりが希薄になり、個々に分断され孤立化が進みます。一方で、映画館は空間や感情を共有できる場所ですから、個々別々の環境とは本質的に異なります。個の時代と言われている時に、映画館はどのくらい必要かということを考えてみたことがあるのですが、完全に個人個人が別々では面白くない、やはり集まりたくなるといったことがコロナの時代に証明されたと思います。

コロナ禍の世界が一番そうです。集まるのは避ける、自粛するということに集まって観るものということですから、社員にはお客様に居心地のいい空間を提供する努力をしましょうという話をするのですけれど、やはり来てよかった、観てよかったと思ってお帰りになつていただけばいいなと思つて、そうした理念はどんな時代でも貫き通したいし、空間の共有とか感動の共有ということは映画館にとって一番大事な要素だと思っています。

映画の新たな観方 応援上映

Q 応援上映という方法が注目されていますが・・・

コロナ感染の前に「応援上映」という上映方法が流行し始めました。一般的には映画

【2面に続く】